

福澤研究センター通信

Newsletter of Fukuzawa Memorial Center for Modern Japanese Studies, Keio University

第10号 2009年3月31日 発行

目次

*センター開設25周年記念ワークショップ概要……………	2	*主な動き……………	10
*主な新収集資料……………	6	*福澤研究センター諸記録……………	11
*『慶應義塾史事典』を刊行して……………	9	*スタッフ一覧……………	12



1. 東京会場となった表慶館



2. 表慶館入口ホール



3. 第1部「あゆみだす身体」での展示



4. 第6部「ひろげゆく世界」での展示 (2~4:撮影 石戸 晋)

「福澤諭吉展」はじまる

慶應義塾創立150年を記念して、福澤諭吉の誕生日にあたる1月10日を皮切りに3月8日まで「未来をひらく 福澤諭吉展」が上野の東京国立博物館・表慶館で開催されました。東京国立博物館、慶應義塾、フジサンケイグループ(主管:産経新聞社)の主催によるもので、福澤研究センターは第1～6部の展示を担当しました。この後、福岡市美術館(5月2日～6月14日)、大阪市立美術館(8月4日～9月6日)を巡回します。また、「福澤諭吉と神奈川展」が神奈川県立歴史博物館(8月22日～9月23日)で開催される予定です。 展覧会情報 <http://www.fukuzawa2009.jp/>

福沢研究センター開設25年記念ワークショップ「近代日本と慶應義塾」

2008年12月5日(金) 10:30～16:30
於：三田研究室棟A会議室

〈第1 報告〉

近代日本の経済発展と地方企業家

— 静岡県引佐郡・伊東要蔵を事例として —

いし い す み よ
石 井 寿美世

(慶應義塾福沢研究センター『150年史資料集』調査員)

本報告の目的は、明治期日本における経済発展の諸相を解明すべく、在来産業に従事した地方企業家の経済思想と経済活動との連関の分析にある。事例として静岡県引佐郡（現・静岡県浜松市）の伊東要蔵（1864–1934）を取り上げ、家産運用に着手した明治22（1889）年前後における人間観・社会観を基に考察した。

要蔵は、当地の大地主・伊東磯平治（1832–1901）の養嗣子として農業・養蚕業などの家業を軸に教育・金融・鉄道の分野へ進出し、地方経済の発展に尽くす。また村・郡・県会議員、衆議院議員も務めた。彼は明治12年に慶應義塾へ入学、14年に卒業しており、義塾出身の地方企業家・政治家といえる。

要蔵は、人間は内面的要素「智」「心」、外形的要素「形体ノ働」つまり行動から成り立つとする。また、「智」「心」を伴った行動の重要性を認識し、二者が完璧でない限り行動も完全とは成り得ないとした。一方、社会は「理」「情」を内面的要素とする動態的なもので、「理」は「有形理学（フィジカルサイエンス）」と「無形道理学（フィロソフィー）」、「情」を「道德心」と捉えた。また「情」の具体相を「孝悌忠信、国家愛、それらの利害の考慮」とし社会の外形的要素とする。そして「智」「心」「理」「情」は学校教育で涵養され、経済活動に必要なものと考えた。また、社会を構成することは人間の天性であり、人間と社会とは相即的關係をなし、人間の「智」「心」は社会の「理」「情」に相応すると理解した。さらに、人間と社会を繋ぐのは人間の行動であるとした上で、人間は天性を養い社会を発展させるべき存在と述べ、動態的な社会に働きかける人間の能動的行為を重視した。現に経済活動にあたる要蔵は、こうした人間と社会の関係をより具体的に理解したはずである。つまり、人間は要蔵自身、「孝悌」は伊東家、「忠信」は地域、「国家」は日本が想定され、それらは密接不可分であり、要蔵を中心に家・地域・国家が同心円の構造で把握されたのである。換言すれば、「智」「心」を備えた要蔵の経済活動は、

家・地域・国家の利害への思慮を具現化する行為であり、その発展を齎す能動性を持つべきものといえる。

こうした考えは、実際の経済活動即ち家産運用にも反映していた。明治22年、要蔵は磯平治の求めで家産管理に関する契約を結び、予め意見書も提出して次の取り決めをする。① 要蔵の運用財産は伊東家総有の家産であり、要蔵の私有資産ではない。② 要蔵が運用して得た「純収益」の3%は「賞与」として彼の「私有」とする。実際に当年度、純利益約2067円の3%分60円の賞与計上がある。計上の理由は、私有分が無く「幾分ノ」「権利」と「自由」を欠くことは「人情」として耐え難く事の完遂の妨げとなるためである。ここには、「心」が完全でなければ行動も完璧に成り得ないという人間観が反映している。また、要蔵という人間と伊東家という社会は相即的で利益相反しないことから、「幾分ノ」とは家産に損失を与えない程度を意味する。つまり「私有」には伊東家総有財産の中の持ち分という意識が込められているのである。賞与の設定からはさらに、家を会社組織と見立てた近代的経営の試みが読み取れる。家産を資本、出資者を伊東家とし収益は伊東家へ、要蔵を運用者として経営の報酬（賞与）を家産に損失を与えない限りで計上するのである。また、簿記・会計学も採用され、これは経済活動には「智」が必要という認識の反映といえよう。

要蔵の経済思想と経済活動は、ある程度の整合性を持っていた。また、在来産業経営に新手法の導入を試み、地域経済発展に資するインフラには銀行・鉄道など新しい仕組みを活用した。発想の基点となる人間観・社会観に底流する在来的要素に、手法として「近代的な」要素を接木したのである。こうした着想は、新しい時代の動きを実感する上京遊学が契機と考えられる。明治前期には、上京遊学後に郷里で起業する者が少なからずいた。その一人である要蔵の事例からは、明治期経済発展の局面において、在来的な観念と新思潮を折衷させ自身の行動を支える精神のあり方や経済活動の方向性を見出そうとした人物、経済の現場に立脚し在来産業に軸足を置き日本経済を地方から支えた企業家の存在が指摘できる。

質疑応答要旨

石井寿美世氏の報告は、伊東要蔵を素材として、近年日本経済史の分野で再評価が行われている明治・大正期の在来産業に従事し、主導的な役割を果たした地方企業

家の経済思想について、実際の企業活動に関連づけながら考察したものである。要蔵は、明治14年に慶應義塾を卒業後、引佐郡中川村（現浜松市）の伊東家の養嗣子となり家督を相続。以降、地主経営を展開するとともに、銀行・鉄道・養蚕部門における企業活動を通じて地域経済の発展に貢献した人物である。石井報告では、20、30歳代のころに書かれた一次資料を通じて、「心」「智」「理」といった内面性を確立した経済主体が、能動的に地域や国家に働きかけることで社会の発達が実現する、という要蔵の人間観・社会観を明らかにした。そして、要蔵の経済思想の発想の基点は「心」「智」「理」というように前近代的なものであったが、実際の家産運用における手法や手段は近代的なものであり、また内面性を確立する上で学校教育の役割を重視していたことが示され、在来的と近代的の2つの要素が融合されていた点に要蔵の経済思想の特質があるとされた。報告で利用した資料が、やや若い時期のものであったために、その後の要蔵の経済思想について明確でない点もあったが、慶應義塾での学習内容や福沢諭吉がどのような影響を彼に与えたのか、また在来思想ともいえる報徳思想と要蔵がどのような関係にあったのかなどの興味深い問題点が示された。

た　ぐ　ち　ひ　で　あ　き
田　口　英　明・記
(慶應義塾福沢研究センター『150年史資料集』調査員)

〈第2報告〉

福沢諭吉と竹越与三郎の比較研究

ほ　り　か　ず　た　か
堀　和　孝
(慶應義塾福沢研究センター『150年史資料集』調査員)

初期の慶應義塾出身者である竹越与三郎（1865－1950）については、2002年に初の評伝（高坂盛彦『ある明治リベラリストの記録』）が中央公論新社より刊行されたのに続き、2005年には主著の『新日本史 上・中』（1891、1892）が西田毅氏の校注により岩波文庫に収録されるなど、次第に注目が集まりつつある。しかし、竹越が生前に発表した著作の膨大さに比べれば、彼に関する研究は依然として少ない。戦前期を代表する史論家の一人であった竹越の明治維新観は、福沢のそれとどのように重なりどのように異なっていたのか。本報告ではそ

の点を考察した。

徳富蘇峰との「瘠我慢の説」論争に見られるように、福沢にとって明治維新は生涯の最後まで頭から離れない問題であった。その福沢が初めてまとめた明治維新観を提示したのは、彼の著作中「唯一の体系的原論」（丸山真男）とも評される『文明論之概略』（1875）においてである。そのなかで福沢は、明治維新を「王室の威光」や「執政の英断」によってなされたとする見解を斥け、「智力と専制との戦争」と規定した。つまり、「一般の智力」の目的は「復古攘夷の説を先鋒に用ひて旧来の門閥専制を征伐」することにあつたからこそ、「革命復古」の後に「攘夷の挙」は起こらず、幕府とともに「併せて大名士族をも攘斥」したというのである（第5章前論の続）。福沢によれば、維新の原動力となった「衆論」の源となったのは、江戸時代の総人口約3千万人中の500万人を占める「士族」のなかの一部に過ぎなかった。このように開明的な人の持つ「智力」が大きければ数の少なさをカバーできるという発想は、『学問のすゝめ』五編（1874）で展開されている私立中産階級主導の日本文明化構想とも整合的であった。



竹越の明治維新観が最も明快に表れているのは、『新日本史 中』の「維新革命に関する根本思想及び皇位性質の変遷」と題する一節である。そこで竹越は福沢と同様、明治維新の「動機」を「勤王論」に求める見解を否定し、維新を「現在身に降り積もりたる痛苦に堪えずして発したる乱世的の革命」と規定する。そのうえで、泰平の続く幕府の「威力」が衰えていったこと、「武士」と「町人百姓」の関係に変化が生じたことなどを挙げるのだが、これに続けて、「幾多の豪傑談、演劇は、悪代官と良名主との争を以て綴り為されたるを見ては、実に

庄屋名主は、幕府時代に於て民権の一大城塞たりしを見るべき也」「若し此儘にして押し進まば、仮令ひ尊王討幕の名を以て起るものなしと雖も、武士と平人との間に於て一大衝突を来たすは到底免れざりし也」と述べているところに注目したい。かかる竹越の認識と、「古より平民は国事に関ることなき風なれば、此度の事に就ても固より之を知らず」とする福沢の明治維新観の間には異質性が認められるのである。



慶應義塾在学中、福沢の官民調和論に強く反発した竹越であるが、両者の見解の相違は歴史認識にも及んでいた。しかし、日清戦争の勃発により官民調和が国論となると、二人の距離は急速に縮まる。三国干渉以後、「帝国主義」を唱道するようになった蘇峰と袂を分かって時事新報社に復帰し、短期間で再び福沢の許を辞して雑誌『世界之日本』を創刊するという竹越の行動からは、日清戦争が思想界に与えた衝撃の大きさを見て取ることができる。

質疑応答要旨

まず池田幸弘氏より、福沢諭吉や徳富蘇峰などが「ミッツルカラッス」「中等階級」として活躍を期待した地主層の実態について質問がなされた。堀氏は、松方デフレの影響などで日本の地主層は大きな打撃を受けており、福沢や徳富が期待したような活躍はできなかったのではないかと答えた。

次に、岩谷十郎氏より、『学問のすゝめ』で福沢が強調していた官民調和論を竹越はなぜ理解できなかったのか、福沢の官民調和論自体に変化はなかったのか、以上2点について質問があった。堀氏は、福沢が官民調和を唱えるのは明治14年の『時事小言』執筆の頃からではな

いかと述べた上で、官民調和論自体に大きな変化は見られない、と答えた。これに対し岩谷氏は、『学問のすゝめ』の中にも官民調和論は明確に出ていると考える、との自説を述べた。

最後に、天野嘉子氏より、福沢諭吉の書簡などの中に井上毅について述べているものはあるかについて質問がなされ、堀氏より自分が把握している限り存在していないとの回答があった。

よし おか たく
吉 岡 拓・記
(慶應義塾福沢研究センター『150年史資料集』調査員)

〈第3 報告〉

大正末期における虚弱児教育と 慶應義塾大学

——「佛蘭西寄贈病院育教事業」を中心に——

の ぐち ほ だか
野 口 穂 高
(早稲田大学教育・総合科学学術院 助手)

本発表は、慶應義塾大学医学部によりおこなわれた標記事業について、同時代の「虚弱児教育」における意義を明らかにするものである。

佛蘭西寄贈病院は、1923年に発生した関東大震災の被災者救護を目的に、臨時震災救護事務局により芝区有馬ヶ原（現港区三田）に臨時に設置された。フランスからの救援物資をもとに開設されたため「佛蘭西寄贈病院」という名称が付された。医療活動には慶應義塾大学医学部の関係者があたり、茂木蔵之助が院長、正木俊二が副院長に嘱任されている。ただし、開設が翌1924年と遅れ復興がある程度進んでいたために、虚弱児教育における新しい試みとして注目されていた「林間学校」を実施したのであった。

同病院による林間学校は「育強事業」と称され、1924年2月以降児童の受入れを開始し、東京市内から総計で約700名の「虚弱児童」が「育強」を受けている。入院期間は約3週間とされ、自律的な生活習慣確立のための規則的生活の奨励、「栄養学」に基づく栄養供給、野外遊びを通じた体育、プロジェクトメソッドによる作業中心の学習などが行われ、その心身と知性の成長が目指された。当時の虚弱児童の教育においては、「安静」「養生」

が重視され学習と運動の制限がおこなわれていた。このような状況において、積極的な身体活動を通じて、子どもの健康回復と増進を目指した点は同病院の大きな特色である。

一方、同病院には研究機関としての側面もあった。医師らは児童に対し身体測定、家庭環境・生活環境の調査、栄養と身体発達の関係調査などを実施し、子どもの身体が虚弱となる要因を分析している。同病院では健康な児童と虚弱児童それぞれについて、家族の健康状態、家庭環境、食生活等多方面からの調査を実施した。そして両者の比較分析により、遺伝や疾病等の先天的要因ではなく貧困とそれによる悪質な生活環境など、後天的要因が児童の身体虚弱に強く関係していることを究明している。

これらの調査結果を受けて、同病院では運動・学習方法の改善や、子どもが一日に必要な栄養を摂取するための「標準食量」の決定がおこなわれた。とりわけ同事業で重視されたのは自己の身体への意識を高め、自律的で衛生的な生活習慣を確立することである。それは、子どもの身心の健康を完全に回復することを主眼とするのではなく、子どもが自己の身体に意識を向け、健康の大切さを実感し、日々の生活の中でその維持と増進に努力するための基礎的な態度・知識・技能を習得させようとするものであった。

同時期の「虚弱児教育」においては、「虚弱」という現象面にのみ注目が集まり、短期間で身体発達を促進させることに終始する傾向があった。これに対して①「虚弱」の要因に着目し、科学的調査を通じてその主な要因が貧困であることを明らかにしたこと、②長期的な視野に立ち、子どもが自己の身体への意識を高め、衛生習慣を確立し、自己の身体へ意図的に働きかけることで健康回復を目指す教育をおこなった点は同事業の大きな特色であり、同時代における他の教育活動と比較しても先駆的な実践であったといえる。

一方で、周知のように大正期の貧困は社会構造によって必然的に発生するものであり、個人の努力で克服可能な範疇を超えていた。そのため、子どもに対処療法的な衛生知識を習得させるのみでは、一定の予防・回復効果が期待できるとはいえ不十分であった。また、子どもが意識的に健康な身体を育むことを目指しても、そのための環境や方法が十分に整えられない状況にあっては大き

な効果が期待できないのであり、この点においては同病院の事業は歴史的制約を含まざるを得なかったのである。



質疑応答要旨

質疑応答では、虚弱児教育が始められた経緯とその背景にある都市問題の動向に焦点が当てられた。当初、仏蘭西寄贈病院育教事業は関東大震災の被災者救護の流れを引き継いで行われたものであった。しかし、次第に都市化による弊害として虚弱児問題が捉えられるようになり、貧困や身体の虚弱性ととともに精神の脆弱性が問題視されるようになった。精神面を重視した背景については、犯罪抑止のための道徳教育の実践を意図していたことが示唆された。

児童を対象とした林間学校の期間・目的に関する議論では、短期間で生活習慣に対する考え方の改善が目指され、健康の回復そのものよりも自己の身体に対する意識向上に力点を置いていたことが主張された。

また、教育・衛生政策全体との関係についても議論がなされた。虚弱児教育と20世紀初頭の新教育の流れや文部省・内務省の政策との関係については、文部省が林間学校の奨励を行っていたものの、直接的な介入には消極的であり、新教育や内務省の政策とも関連が薄いことが示唆された。本報告の慶應義塾大学医学部の事例をはじめ、虚弱児教育は行政主導ではなく、民間主導で進められたことが示され、都市問題に対する私立学校の役割の大きさが強調された。

はし の たか のり
星 野 高 徳・記
(慶應義塾福沢研究センター『150年史資料集』調査員)

主な新収資料

平成20年3月から平成21年2月までに収蔵された資料のうち、主なものを紹介します。

今年度は創立150年を迎え、多くの方々からたくさんの資料の寄贈や寄託を受けた1年になりました。特に慶應義塾に関する資料は、『三田評論』やちらしでの呼びかけもあり、格段に収集が進みました。ご協力いただいた方々すべてに感謝の意を表するとともに、紙幅の都合上、全資料を紹介することができないことをお詫び申し上げます。

購入資料は、近年インターネット上のオークションによるものが増えてきました。以前は明治古典会の七夕古書大入札会や秋の古典籍展観大入札会での資料購入が主でしたが、この2、3年でyahooなどのオークションにも、福沢諭吉の書幅や書簡、原稿などと称するものが頻繁に出るようになりました。残念ながらそれらは、字体や落款などに問題があるものが多いようです。しかしながら慶應義塾史に関するもの、たとえば卒業アルバムや明治期の在校生の日記など大変貴重な資料の出品もあります。店舗を構えている古書店や古美術商と異なり、状態を確認せずに購入しなければならないというリスクも伴うものなので、インターネットオークションの扱いは、研究のための資料収集にとっては必ずしも便利とはいえない状況です。また価格操作の源にもなるものなので、不用意に高値の入札をしないよう留意しています。

はじめに、今年度まとまって数多くの資料をいただいた田中一貞関係資料および小泉信三関係資料から紹介します。
(故人は敬称略)

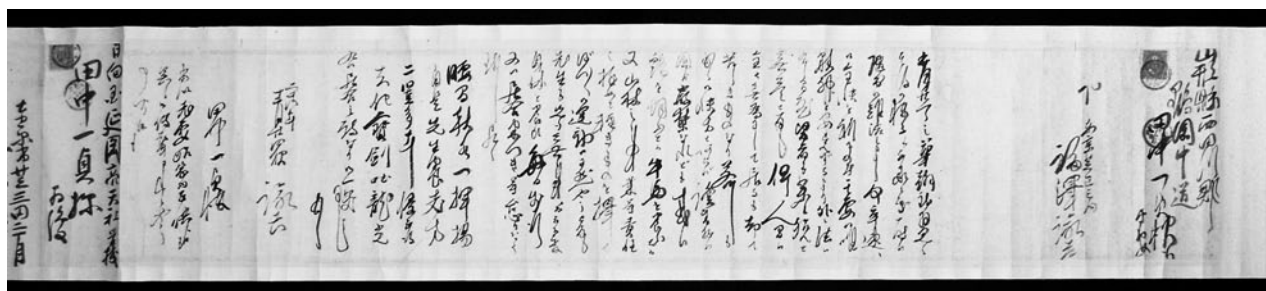
田中一貞関係資料

田中一貞の孫にあたる田中達彦氏（塾員）より、一貞旧蔵の福沢諭吉書簡や書幅、家族や知人に向けて発信した絵葉書など500点余をご寄贈いただきました。

田中一貞は、初代慶應義塾図書館長（当時の正式名称は監督）を務めた人物で、明治5（1872）年山形県鶴岡に生まれ、23年に慶應義塾に入学し、29年文学部文学科を卒業しました。その後、日向延岡にあった私学亮天社の社頭を務め、34年には義塾からの第2回海外留学生としてイェール大学大学院に入り、マスター・オブ・アーツの学位を取得、その後パリで学び、欧州各国を視察して37年に帰国したのちは、慶應義塾で教鞭をとりました。大正10（1921）年に亡くなっています。

■ 田中一貞宛福沢諭吉書簡 明治28年12月24日付 1巻

鶴岡で病氣療養中の田中に対する見舞状。無理のない運動を勧め、自分は身体を養うため「歩行、又ハ居合、米つき」をしていることを述べ、居合をうたった漢詩を添えています。他に明治31年11月24日付の田中宛小幡篤次郎書簡と大正4（1915）年6月11日付田中宛鎌田栄吉書簡の2通とあわせて、卷子仕立てになっています。



■ 福沢諭吉書幅 漢詩「交人如乗馬 御法在吾存 得失素無定 是非何足論」 1幅 関防印「無我他彼此」落款「雪池」「福澤諭吉」

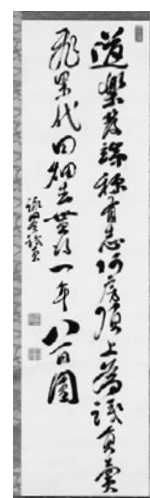
この詩は明治11（1878）年の作といわれており、societyを「人間交際」という概念でとらえた福沢が、人付き合いについて述べているものです。「人とつきあうのは、馬に乗るようなものだ。馬の扱いは全て自分のせいで馬のせいではない。人とのつきあい方や乗馬の上手下手は決まりがあるわけではなく、やり方を論じても始まらず、うまくいくもいかないも自分の器量によると知るがいい」という意味です。

■ 福沢諭吉書幅 漢詩「医略句余与病争 攻防謀得告功成 吾家慶事人如問 廿二之児今日生」 1幅 関防印「無我他彼此」落款「三十一谷人」「福澤諭吉」

これは明治22（1889）年9月に家族で京阪地方を旅行したあと、長女さと（里）が腸チフスに罹り、一時は危篤状態にまで陥ったものの、松山棟庵・印東玄得らの診療により九死に一生を得た喜びをうたったものです。「己丑十一月長女病癒喜賦」と題し、医師たちの尽力に感謝し、治癒の喜びを「（おめでたいことは何かと聞かれたら）今日22歳の子どもが生まれたのだと答えよう」と表現しています。

■ 福沢諭吉書幅 漢詩「道楽発端称有志 阿房頂上為議員 売飛累代田畑去、貰得一年八百円」 1幅
関防印「無我他彼此」落款「三十一谷人」「福澤諭吉」

明治27（1894）年の作。23年に国会が開設されると、政治熱に浮かれて、家業をおろそかにし家産を使い果たす若者が次々と現れました。福沢はそうした状況を憂い、揶揄して「詠田舎議員」と題し、この詩を詠みました。「道楽の発端 有志と称し、阿房の頂上 議員と為る 累代の田畑を売り飛ばし去って 貰い得たり一年八百円」（政治道楽のそもそもの起ころしは有志者と称して、いっばしの名士気どりで奔走することから始まり、たわけのてっぺんが国会議員になって嬉しがっているヤツだ。先祖代々の田地田畑を売り飛ばして使い果し、その揚句に八百円の歳費がもらえる身分になったといつて得意になっているのだからあきれたものだ）。



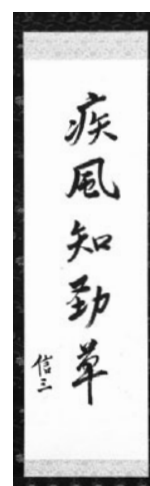
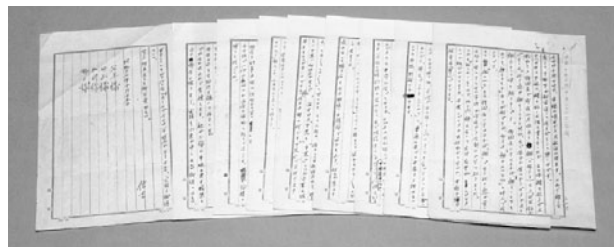
小泉信三関係資料

平成20年5月8日から21日まで慶應義塾大学図書館旧館2階大会議室において、「小泉信三展」を開催いたしました。その折、2005年に遺品・遺稿等をご寄贈いただいた小泉妙氏（信三次女、塾員）より、重ねて信三愛用の品々や信三長男信吉の手紙などの資料のご寄贈がありました。

■ 愛用のめがね



■ 小泉信吉最後の書簡（昭和17年10月15日付）



また展覧会にあたりご協力いただいた河原一慶氏（塾員）より、会期後ご自身が苦労して収集された小泉関係資料約200点のご寄贈がありました。木村莊五郎や清岡暎一にあてた書簡や自筆原稿など貴重な資料の数々です。

■ 小泉信三書幅「疾風知勁草」

■ 小泉信三自筆原稿「筆の暴力」

初出は『文芸春秋』昭和38年6月号。『小泉信三全集』第20巻（p.231～p.234）に収録されています。

福沢諭吉書幅

■ 漢詩「向暑之砌市会開 政熱自連時候催 昨夜老翁脱布子 今朝又剥公権来」 1幅

関防印「無我他彼此」落款「三十一谷人」「福澤諭吉」

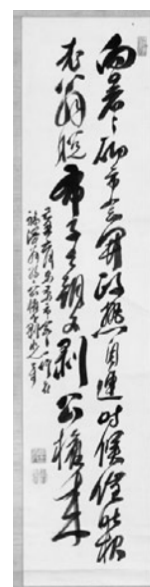
福沢が、明治22年に選ばれた最初の東京市会の名譽職市参事会員を辞退したことを巡り、「己丑六月東京市会的一件二付 福澤翁將に公権を剥れんとす」と公権剥奪騒ぎにまで至ったことを記しています。寄贈者の佐々木幸子氏は旧蔵者である佐々木駒之助のご子孫。

■ 漢詩「吾是十方世界身 由来到処物相親 人言聞去皆称善 耳順何期六十春」 1幅

関防印「無我他彼此」落款「三十一谷人」「福澤諭吉」

自分が天地間のどこにあって万物と親しい関係を保っている状況について語ったものです。

偶然別々の2名の方より、同一文言の書幅の寄贈と寄託を受けました。

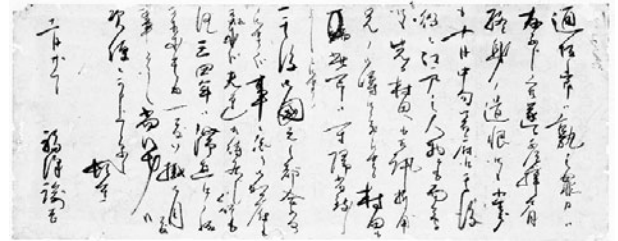


福沢諭吉書簡

今年度は創立150年記念の年にふさわしく、慶應義塾の根源を示す貴重な書簡を入手することができました。

■ 宛名未詳宛 安政5（1858）年11月22日付 扁額1点

1通目は現存する福沢諭吉自筆書簡としては最古のものです。この書簡から、福沢が築地鉄砲洲の中津藩中屋敷内にあった蘭学塾の教師として江戸に上京した時期、すなわち慶應義塾がはじまった時期が10月中旬であることがわかります。また3、4年江戸に滞留すると書かれていて、福沢が当初は教師を長く続けるつもりではなかったことがわかります。



■ 山口良蔵宛 慶應4（1868）年閏4月10日付 1点

2通目は、前号表紙でお伝えした、慶應義塾の「半学半教」の精神を示す言葉「僕は学校の先生にあらず、生徒は僕の門人にあらず」が書かれた書簡です。幕府の遣欧使節団の一員として派遣された欧州で、富国強兵の急務は人材育成であることを確信した福沢の、その後の学校経営の精神を知ることができます。

また以下の2通は、長く慶應義塾幼稚舎長を務められた故古田小五郎の所蔵品です。柏崎市にあった資料保存館が地震の被害を受け、このほど一括して慶應義塾図書館に寄贈され内書簡は福沢研究センターの所蔵となりました。

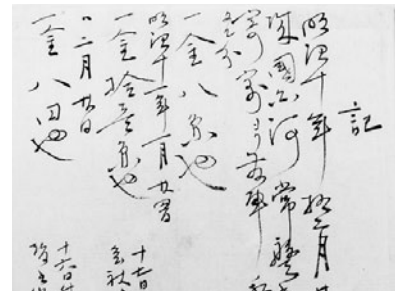
■ 福沢英之助宛 明治20（1887）年6月6日付 外国商社への入社希望者を紹介したもの。 1幅

■ 宇都宮三郎・宇都宮貞宛 明治23年カ11月29日付 親戚の集りへの招待状。貞の妹が福沢長男一太郎の嫁。 1幅

慶應義塾関係資料

■ 松原岩治郎（重栄）「東都修学経費録」 1綴

明治11（1878）年1月～14年12月までの金銭出納帳。松原は山形県天童の出身で、10年慶應義塾入塾。伊勢新聞社に勤めたあと中国を経て渡米。その後日米貿易に関心を寄せ、才能を発揮。村井商会の総支配人となると、業績を大幅に伸ばした。垂米利加煙草会社、千代田生命保険会社などに関わり、森村組紐育副支店長をも務める。この資料は、孫にあたる松原秀一氏（塾員）から寄贈を受けました。



■ 授業の始まり終わりを告げる鐘 1点

寄贈者小嶋弘子氏の祖父蔵田宜彦は、兄の高羅殿丸と共に萩郊外在住の塾員滝口吉良に師事し英語を学び、のち慶應義塾へ入塾し苦学しました。兄は「塾僕」（義塾の用務係）の仕事もこなし、弟は朝食事を終えると大学に走り鐘を鳴らすのが役目であったそうです。両名とも、おそらくは朝の福沢の散歩の共をする散歩党の一員で、30年にそろって慶應義塾を卒業しました。

■ 藤原銀次郎書簡（榎智雄宛 昭和23年5月） 1通

自分はもう年であるが、生涯、慶應義塾に協力を惜しまない旨を述べています。寄贈者上田愛氏の夫君は、初代防衛大学校長の榎智雄を補佐した方で、この書簡を譲り受けたそうです。



『慶應義塾史事典』を刊行して

2008年に創立150年を迎えるにあたり、福沢研究センターでは1993年より、何が記念刊行物としてふさわしいのかについて検討を開始しました。そして近代日本研究の中で現在慶應義塾史研究が求められているものは、基礎資料の収集・整理・刊行であるという意見にまとまりました。その結果、全21巻におよぶ『慶應義塾150年史資料集』を20年かけて刊行し、記念式典が行われる2008年には別巻として事典を編纂することになりました。

事典という形をとると、150年を多角的に眺め、各々の興味に従ってアプローチすることができます。編纂にあたっては、単に「引く」だけの事典に止まらず「読む」こともできるものを目指しました。また学事や学校経営の正史だけでなく、食堂やサークル活動、キャンパスの建造物など身近な項目も設け、大学内のモニュメントや学生の服装の変遷など「眼で見て」楽しめるページも作りました。しかし編纂作業が進むほど足りない部分も明らかになり、不十分な調査に終わってしまったものもあると思います。是非ともご一覽いただき、様々なご指摘をいただければ幸いです。

〔発行：慶應義塾 2008年11月刊行 A5判上製 976頁/函入り 定価17,850円〕



〈内容見本〉より

1,097項目におよぶ、
150年のものがたり。

発行：慶應義塾
A5判上製、976頁／図入り
定価 17,850円〔税込〕
2008年11月刊行

時の流れからも、興味のある事柄からも、人物からも^{ひと}種くことのできる“読む事典”です。新発見や初公開を含めた写真895点により、見る楽しさへと誘います。

歴史・ 文藝・ 学術史	1 慶応義塾の一九〇一年	1 慶応義塾の創立・2 大学の発展路・3 旧制大学 慶応と旧開成校 4 戦前戦中の大学政策・5 戦後の大学政策・6 組合制の発展と展開 7 大学と2 経済界との関係・8 経済界・9 商学教育・10 総合大学部・経済教育学部・8 看護系学部 11 工学部・10 短大史料・11 日本キヤンパスの発展・12 看護教育部・13 経済学部・14 開いた大学
	2 大学・大学院・研究所	
	3 教育・教育行政	
	4 高等教育学	1 高等教育と看護部・2 中部部・4 高等学校・5 志志高等学校
	5 教育・研究の支援	6 女子学舎・7 用務課中・中部部・中部部・8 ユニークな施設
	6 教育・研究の支援	9 研究・管理・研究・2 学部研究・研究センター・3 看護部・4 学生生活・5 学生生活・6 関連機関
	7 学生生活の支援	7 学生生活と2 施設・カレッジ・3 看護部・4 学生生活・5 学生生活・6 関連機関
	8 キャンパス	1 三軒三軒・2 日本・3 日本・4 日本・5 日本・6 日本・7 日本・8 日本・9 日本・10 日本・11 日本・12 日本・13 日本・14 日本・15 日本・16 日本・17 日本・18 日本・19 日本・20 日本・21 日本・22 日本・23 日本・24 日本・25 日本・26 日本・27 日本・28 日本・29 日本・30 日本・31 日本・32 日本・33 日本・34 日本・35 日本・36 日本・37 日本・38 日本・39 日本・40 日本・41 日本・42 日本・43 日本・44 日本・45 日本・46 日本・47 日本・48 日本・49 日本・50 日本・51 日本・52 日本・53 日本・54 日本・55 日本・56 日本・57 日本・58 日本・59 日本・60 日本・61 日本・62 日本・63 日本・64 日本・65 日本・66 日本・67 日本・68 日本・69 日本・70 日本・71 日本・72 日本・73 日本・74 日本・75 日本・76 日本・77 日本・78 日本・79 日本・80 日本・81 日本・82 日本・83 日本・84 日本・85 日本・86 日本・87 日本・88 日本・89 日本・90 日本・91 日本・92 日本・93 日本・94 日本・95 日本・96 日本・97 日本・98 日本・99 日本・100 日本・101 日本・102 日本・103 日本・104 日本・105 日本・106 日本・107 日本・108 日本・109 日本・110 日本・111 日本・112 日本・113 日本・114 日本・115 日本・116 日本・117 日本・118 日本・119 日本・120 日本・121 日本・122 日本・123 日本・124 日本・125 日本・126 日本・127 日本・128 日本・129 日本・130 日本・131 日本・132 日本・133 日本・134 日本・135 日本・136 日本・137 日本・138 日本・139 日本・140 日本・141 日本・142 日本・143 日本・144 日本・145 日本・146 日本・147 日本・148 日本・149 日本・150 日本・151 日本・152 日本・153 日本・154 日本・155 日本・156 日本・157 日本・158 日本・159 日本・160 日本・161 日本・162 日本・163 日本・164 日本・165 日本・166 日本・167 日本・168 日本・169 日本・170 日本・171 日本・172 日本・173 日本・174 日本・175 日本・176 日本・177 日本・178 日本・179 日本・180 日本・181 日本・182 日本・183 日本・184 日本・185 日本・186 日本・187 日本・188 日本・189 日本・190 日本・191 日本・192 日本・193 日本・194 日本・195 日本・196 日本・197 日本・198 日本・199 日本・200 日本・201 日本・202 日本・203 日本・204 日本・205 日本・206 日本・207 日本・208 日本・209 日本・210 日本・211 日本・212 日本・213 日本・214 日本・215 日本・216 日本・217 日本・218 日本・219 日本・220 日本・221 日本・222 日本・223 日本・224 日本・225 日本・226 日本・227 日本・228 日本・229 日本・230 日本・231 日本・232 日本・233 日本・234 日本・235 日本・236 日本・237 日本・238 日本・239 日本・240 日本・241 日本・242 日本・243 日本・244 日本・245 日本・246 日本・247 日本・248 日本・249 日本・250 日本・251 日本・252 日本・253 日本・254 日本・255 日本・256 日本・257 日本・258 日本・259 日本・260 日本・261 日本・262 日本・263 日本・264 日本・265 日本・266 日本・267 日本・268 日本・269 日本・270 日本・271 日本・272 日本・273 日本・274 日本・275 日本・276 日本・277 日本・278 日本・279 日本・280 日本・281 日本・282 日本・283 日本・284 日本・285 日本・286 日本・287 日本・288 日本・289 日本・290 日本・291 日本・292 日本・293 日本・294 日本・295 日本・296 日本・297 日本・298 日本・299 日本・300 日本・301 日本・302 日本・303 日本・304 日本・305 日本・306 日本・307 日本・308 日本・309 日本・310 日本・311 日本・312 日本・313 日本・314 日本・315 日本・316 日本・317 日本・318 日本・319 日本・320 日本・321 日本・322 日本・323 日本・324 日本・325 日本・326 日本・327 日本・328 日本・329 日本・330 日本・331 日本・332 日本・333 日本・334 日本・335 日本・336 日本・337 日本・338 日本・339 日本・340 日本・341 日本・342 日本・343 日本・344 日本・345 日本・346 日本・347 日本・348 日本・349 日本・350 日本・351 日本・352 日本・353 日本・354 日本・355 日本・356 日本・357 日本・358 日本・359 日本・360 日本・361 日本・362 日本・363 日本・364 日本・365 日本・366 日本・367 日本・368 日本・369 日本・370 日本・371 日本・372 日本・373 日本・374 日本・375 日本・376 日本・377 日本・378 日本・379 日本・380 日本・381 日本・382 日本・383 日本・384 日本・385 日本・386 日本・387 日本・388 日本・389 日本・390 日本・391 日本・392 日本・393 日本・394 日本・395 日本・396 日本・397 日本・398 日本・399 日本・400 日本・401 日本・402 日本・403 日本・404 日本・405 日本・406 日本・407 日本・408 日本・409 日本・410 日本・411 日本・412 日本・413 日本・414 日本・415 日本・416 日本・417 日本・418 日本・419 日本・420 日本・421 日本・422 日本・423 日本・424 日本・425 日本・426 日本・427 日本・428 日本・429 日本・430 日本・431 日本・432 日本・433 日本・434 日本・435 日本・436 日本・437 日本・438 日本・439 日本・440 日本・441 日本・442 日本・443 日本・444 日本・445 日本・446 日本・447 日本・448 日本・449 日本・450 日本・451 日本・452 日本・453 日本・454 日本・455 日本・456 日本・457 日本・458 日本・459 日本・460 日本・461 日本・462 日本・463 日本・464 日本・465 日本・466 日本・467 日本・468 日本・469 日本・470 日本・471 日本・472 日本・473 日本・474 日本・475 日本・476 日本・477 日本・478 日本・479 日本・480 日本・481 日本・482 日本・483 日本・484 日本・485 日本・486 日本・487 日本・488 日本・489 日本・490 日本・491 日本・492 日本・493 日本・494 日本・495 日本・496 日本・497 日本・498 日本・499 日本・500 日本・501 日本・502 日本・503 日本・504 日本・505 日本・506 日本・507 日本・508 日本・509 日本・510 日本・511 日本・512 日本・513 日本・514 日本・515 日本・516 日本・517 日本・518 日本・519 日本・520 日本・521 日本・522 日本・523 日本・524 日本・525 日本・526 日本・527 日本・528 日本・529 日本・530 日本・531 日本・532 日本・533 日本・534 日本・535 日本・536 日本・537 日本・538 日本・539 日本・540 日本・541 日本・542 日本・543 日本・544 日本・545 日本・546 日本・547 日本・548 日本・549 日本・550 日本・551 日本・552 日本・553 日本・554 日本・555 日本・556 日本・557 日本・558 日本・559 日本・560 日本・561 日本・562 日本・563 日本・564 日本・565 日本・566 日本・567 日本・568 日本・569 日本・570 日本・571 日本・572 日本・573 日本・574 日本・575 日本・576 日本・577 日本・578 日本・579 日本・580 日本・581 日本・582 日本・583 日本・584 日本・585 日本・586 日本・587 日本・588 日本・589 日本・590 日本・591 日本・592 日本・593 日本・594 日本・595 日本・596 日本・597 日本・598 日本・599 日本・600 日本・601 日本・602 日本・603 日本・604 日本・605 日本・606 日本・607 日本・608 日本・609 日本・610 日本・611 日本・612 日本・613 日本・614 日本・6

【事項項目は797項目収録】

1
慶応義塾の成立

[illegible]

▼横浜鎌倉の洋行
「6」 福沢諭吉

三浦大祐は、明治維新のころから、西洋文化に興味を持ち、英語を学んで海外に出ることを志す。父・三浦大祐は、彼が海外に出ていくのを反対し、彼を家に閉じこめようとした。しかし、大祐は、父の反対を押し切って、海外に出た。

大祐は、まずアメリカに渡り、ハーバード大学で法学を学ぶ。その後、ヨーロッパ各国を巡り、さまざまな文化に触れた。大祐は、西洋文化の素晴らしさを実感し、日本にも西洋文化を導入しようと思った。

大祐は、帰国後、新聞記者として活躍する。彼は、西洋文化の良さを多くの人に伝えるために、多くの文章を書いた。その中でも、最も有名な作品は、『西洋事情』である。この書は、大祐が海外で見た光景や、感じたことを描き、日本人に紹介している。この書は、大衆的な人気を得た。大祐は、この成功をきっかけに、小説家としての活動も始める。彼の代表作は、『西洋事情』と『西洋事情』である。この二つの作品は、大祐の代表作であり、日本の近代文学史上重要な位置を占めている。

A piece of Chinese calligraphy in cursive script, featuring bold, expressive strokes. The text is written vertically on a light-colored background. On the left side, there are two vertical inscriptions: "王孟書" (Written by Wang Meng) and "丁巳年" (Ding Si year). A red seal is visible at the bottom left.

三浦重良（左）、島田重良（中）、島田重良（右）
（島田重良は、島田重良の次男である）

「ハタチ分で渡航したときであり、
「輕便」として同行した幕府軍艦
丸に船長木村實守の娘婿として、
サンフランシスコに渡った二重
文(一八二六)年幕府の遣欧使
節隊長として、フランハイゼリ
ャンデロアフロシアポルギザ
四州六国を七ヵ月かけて歴訪し
二重目の海外渡航は慶応二(一八六
六)幕府の軍艦「取島丸」の船員として

新発見写真！
オランダにおける環境検査(女々2[1992]年)

…【巻末に付録「慶応義塾史資料」】



 長野県庁「蝶」のシンボルマーク。



 水戸市商工促進会「X」のシンボルマーク。



 長野市庁舎「蝶」のシンボルマーク。



 長野県商工振興会「蝶」のシンボルマーク。



 長野県観光局「蝶」のシンボルマーク。



 長野県観光局「蝶」のシンボルマーク。



 長野県観光局「蝶」のシンボルマーク。



 長野県観光局「蝶」のシンボルマーク。



 長野県観光局「蝶」のシンボルマーク。



 長野県観光局「蝶」のシンボルマーク。



 長野県観光局「蝶」のシンボルマーク。



 長野県観光局「蝶」のシンボルマーク。



 長野県観光局「蝶」のシンボルマーク。



 長野県観光局「蝶」のシンボルマーク。



 長野県観光局「蝶」のシンボルマーク。



 長野県観光局「蝶」のシンボルマーク。



 長野県観光局「蝶」のシンボルマーク。



 長野県観光局「蝶」のシンボルマーク。



 長野県観光局「蝶」のシンボルマーク。



 長野県観光局「蝶」のシンボルマーク。



 長野県観光局「蝶」のシンボルマーク。



 長野県観光局「蝶」のシンボルマーク。



 長野県観光局「蝶」のシンボルマーク。



 長野県観光局「蝶」のシンボルマーク。



 長野県観光局「蝶」のシンボルマーク。



 長野県観光局「蝶」のシンボルマーク。

 長野県観光局「蝶」のシンボルマーク。

 長野県観光局「蝶」のシンボルマーク。

 長野県観光局「蝶」のシンボルマーク。

 長野県観光局「蝶」のシンボルマーク。

 長野県観光局「蝶」のシンボルマーク。

 長野県観光局「蝶」のシンボルマーク。

 長野県観光局「蝶」のシンボルマーク。

 長野県観光局「蝶」のシンボルマーク。

 長野県観光局「蝶」のシンボルマーク。

 長野県観光局「蝶」のシンボルマーク。

 長野県観光局「蝶」のシンボルマーク。

 長野県観光局「蝶」のシンボルマーク。

 長野県観光局「蝶」のシンボルマーク。

 長野県観光局「蝶」のシンボルマーク。

 長野県観光局「蝶」のシンボルマーク。

 長野県観光局「蝶」のシンボルマーク。

 長野県観光局「蝶」のシンボルマーク。

 長野県観光局「蝶」のシンボルマーク。

 長野県観光局「蝶」のシンボルマーク。

 長野県観光局「蝶」のシンボルマーク。

 長野県観光局「蝶」のシンボルマーク。

……【人名項目は300項目収録】

春の講演会・セミナー

◇ 講演会 6月25日(木)午後3時30分～
会場：三田演説館

*詳細はホームページでお知らせいたします。

❖ 主な動き

■ 所長・副所長の交代

9月30日で所長・副所長の任期が満了となり、10月1日より教職課程センター教授・米山光儀君が所長に、法学部教授・岩谷十郎君と商学部教授・平野隆君が副所長に就任した（岩谷君は重任）。任期は、2010年9月30日までとなる。慶應義塾福沢研究センター規程では、副所長は若干名となっており、これまで3名であったこともあることから、副所長の増員も視野に入れて、『慶應義塾150年史資料集』の刊行などの150年記念事業にも臨むことになる。

■ 『近代日本研究』第25巻刊行

11月1日に『近代日本研究』第25巻が刊行された。特集は、前巻に続き「慶應義塾創立百五十年・慶應義塾福沢研究センター開設二十五年」であり、この巻には特集論文7本、査読を経て掲載された論説2本および研究ノート1本、そして講演録1本が収められている。例年よりも4ヶ月ほど刊行を早めたにも拘わらず、多くの論文が寄せられた。なお、『近代日本研究』第26巻は、2010年2月に刊行する予定である。

■ 慶應大阪リバーサイドキャンパスでの福沢研究センター講座開催

塾長室からの依頼により慶應大阪リバーサイドキャンパスで、11月1日より3月14日まで、慶應義塾大学主催慶應義塾福沢研究センター講座「『学問のすゝめ』を読む」が開催された。福沢研究センターの所員が講師となり、一般の人々を対象として、土曜日の午後に2時間の講座を6回開いたが、毎回、定員の60名に近い数の人々が熱心に聴講した。

■ 『慶應義塾史事典』刊行

前号で報告されているように、4年間の歳月をかけて編集が進められてきた『慶應義塾150年史資料集』別巻1の『慶應義塾史事典』は、150年記念式典に間に合うように発刊の準備がなされ、11月8日付で刊行された。『事典』については、本号9頁に紹介されている。

■ 第2分室の明け渡し

メディアセンターから資料収蔵のために借用していた図書館旧館第3書庫地階内の約30平方メートルのスペース（通称第2分室）を2008年末までに返却しなくてはならなくなり、そこに収蔵されていた資料を12月末に東館地下に移動した。そのため、借用中の東館の資料収蔵スパー

スもほぼ満杯となってしまったので、2009年2月には、その一部を寺田倉庫に移した。資料収蔵スペースの確保については、以前から福沢研究センターの大きな課題であったが、展覧会終了後は、そこで使用したパネルなどの収蔵の問題もあり、緊急の課題となっている。

■ 拡大ワークショップ開催

本年は、福沢研究センター開設25年という記念の年であったので、拡大ワークショップを12月5日に開催した。これまでもワークショップは不定期に開催され、『慶應義塾150年史資料集』調査員などの若手研究者の発表のよい機会となっていたが、多くの場合、1名の発表で、平日の夜間あるいは土曜日の午後に開催されてきた。今回は、司会も調査員が行い、3名（調査員2名、学外者1名）の発表者による終日のワークショップとなった。当日の発表内容の概要については、本号2～5頁に掲載されている。

■ 『福澤諭吉事典』編集委員会の再開

福澤諭吉生誕175年となる2010年に『慶應義塾150年史資料集』別巻2として『福澤諭吉事典』を刊行する予定である。同事典は、『慶應義塾史事典』編集委員会と並行して、『福澤諭吉事典』編集委員会を立ち上げ、編集作業を進めてきたが、二つの編集委員を兼ねている者もいたことから、『慶應義塾史事典』編集の最終段階で一時休止とせざるをえなかった。そこで『慶應義塾史事典』刊行後の12月に若干の編集委員の交替を経て、編集委員会を再開した。

■ 「未来をひらく福澤諭吉展」開催

2009年1月10日から3月8日まで、50日の会期で、東京国立博物館表慶館において、慶應義塾創立150年記念の「未来をひらく福澤諭吉展」が開催された。この展覧会は、東京国立博物館、慶應義塾、フジサンケイグループ（主管：産経新聞社）の共催で行われ、慶應義塾では慶應義塾創立150年記念展覧会実行委員会が組織され、福沢研究センターの所長や専任所員も委員となった。展覧会は7部構成で、第1部から第6部までは福沢研究センターが中心となって担当した。また、展覧会開催中は、福沢研究センターの所員・調査員・職員が展覧会場の事務室に詰めて、質問などに対応した。1月10日には展覧会の図録が刊行されたが、その作成についても、多くの部分を福沢研究センターが担った。なお、展覧会の来場者数は、約75,000人であった。

■ 諸会議

- * 平成20年度第2回運営委員会（10月23日）
- * 平成20年度第2回センター会議（12月12日）
- * 『近代日本研究』編集委員会、第26、27巻（1月27日）
- * 『慶應義塾150年史資料集』編纂委員会（11月20日）
- * 『福澤論吉事典』編集委員会
第19回（1月21日）、第20回（2月24日）
- * 『福澤論吉事典』小委員会（11月17日、2月5日）
- * 創立150年記念誌刊行委員会（9月16日）
- * 創立150年記念展覧会実行委員会（10月31日）
- * 展覧会カタログ編集委員会（11月6日）
- * 慶應義塾ゆかりの地・史跡等保存検討委員会（準備会）（2月25日）
- * 開設25年記念ワークショップ（12月5日）
（詳細は本誌2～5頁参照）

■ 人事

〈所長〉

退任 小室正紀（経済学部） ～9月30日
新任 米山光儀（教職課程セ） 10月1日～

〈副所長〉

退任 米山光儀（同上） ～9月30日
新任 平野 隆（商学部教授） 10月1日～

〈研究嘱託〉

新任 三島憲之（東北公益文科大学）11月1日～

■ 展覧会開催

- * 「未来をひらく 福澤論吉展」（1月10日～3月8日：東京国立博物館）

■ 来往

- * 防衛大学校2名、展示相談のため来訪（9月2日）
- * 中津の福沢記念館から当方提供の展示品交換作業のため吉川和彦氏、浅川由紀子氏来訪（9月3～4日）
- * 早大大学史資料センター、教育評論社、出版打合せのため来訪（9月11日）
- * 郵研三田会、連合三田会における展示の相談のため来訪（9月17、24日、10月17、27日、11月7、19日）
- * 東大史料編纂所の谷昭佳氏来訪（9月17日、11月18日）
- * 綱町三田会来訪（9月19日、10月30日、11月17日）
- * 塾員田中達彦氏来訪、資料を寄贈（10月1日）
- * NHK、センター所蔵資料を撮影（10月3日、2月23日）
- * 塾員萩原秀夫氏来訪、最後の早慶戦に関する聞き取り（10月3日、15日）
- * 松原秀一名誉教授来訪（10月10、15日）
- * 塾員松永英二郎氏来訪（10月10日）
- * 駿河銀行小松氏、展示相談のため来訪（10月15日）
- * 藤木立夫氏、調査のため来訪（10月23日）
- * 静嘉堂文庫原徳三氏、福沢書簡を持って来訪（10月27日）
- * 塾員山口元氏来訪、資料を寄贈（10月30日）
- * 憲政記念館古谷ゆかり氏来訪：都倉（10月30日）
- * 刈岡浩二・友美氏来訪、資料を寄贈（11月1日）
- * BS ジャパン金広純子氏、資料を撮影（11月11日）
- * 塾員二村徳子氏来訪、資料を寄贈（11月14日）
- * 塾員福田郁代氏、藤本トモエ氏来訪、資料を寄贈（11月14日）
- * 仙波存乃恵氏（福沢美和氏代理）来訪、資料を寄贈（11月18日）
- * 実践女子学園浪岡正継氏見学のため来訪（11月19日）
- * 防衛大学校10名、見学のため来訪（1月14日）
- * 日本医大唐沢信安氏、殿崎正明氏、見学のため来訪（1月21日）
- * 早大川口浩教授来訪、資料閲覧（1月28日）
- * 塾員島崎一郎氏来訪（2月13日）
- * 藤原真喜子さん来訪、資料の寄託および寄贈（2月17日）
- * 横浜美術館、イリス商会、展覧会資料提供要請のため来訪（2月18日）
- * 神戸史談会前田氏、調査のため来訪（2月20日）
- * 同志社社史資料センター露口所長来訪（2月27日）
- 出張・見学
- * 都倉講師、石井調査員、福沢展資料借用のため丸子郷土博物館（9月1日）
- * 小室所長、赤堀係主任、資料受取りのため吉川尚子氏宅を訪問（9月2日）
- * 石井調査員、福沢展資料借用のため、大阪東洋紡、浜松市博物館

- （9月4～5日）
- * 都倉講師、福沢展資料借用のため、塾員田中総之助氏宅訪問（9月6日）
- * 都倉講師、石井調査員、福沢展資料借用のためニッスイを訪問（9月11日）
- * 都倉講師、吉田調査員、資料受取りのため小泉家を訪問（9月12日）
- * 赤堀係主任、全国大学史資料協議会2008年度総会・全国研究会に参加（10月9～11日：沖縄・琉球大学）
- * 都倉講師、産経新聞社にて展覧会の趣旨説明（10月17日）
- * 西沢准教授、「日びのおしえ」審査会に参加（10月23日：南足柄市）
- * 都倉講師、防衛大学校榎智雄記念室オープニングに出席（10月28日）
- * 都倉講師、麻布善福寺での墓前祭に出席（10月29日）
- * 赤堀係主任、情報保存研究会第2回シンポジウムに出席（10月29日：江戸東京博物館）
- * 小室教授、西沢准教授、福沢展資料借用のため北海道浦河の赤心社（10月29～30日）
- * 都倉講師、赤堀係主任、資料受取りのため塾員益田司氏宅訪問（10月31日）
- * 西沢准教授、資料調査のため中津の今泉家、黒瀬家および福沢記念館（辺見家資料）（11月24日）
- * 赤堀係主任、石井調査員、福沢展資料借用のため大阪の東洋紡社史編纂室（11月27日）
- * 都倉講師、福沢展資料借用のため交詢社（12月1日）
- * 西沢准教授、資料調査および福沢展展示資料借用のため大分の先哲資料館（12月2～3日）
- * 赤堀係主任、石井調査員、福沢展資料借用・返却のため山口県文書館（12月24～25日、2月12～13日）
- * 米山所長、都倉講師、福岡での福沢展プレス発表のため福岡市美術館（2月12日）
- * 西沢准教授、韓国京畿文化財団（実学博物館）、梨花女子大学を訪問（2月22～24日）
- * 西沢准教授、赤堀係主任、資料搬入のため寺田倉庫（2月27日）
- 講師派遣
- * 都倉講師、船橋三田会で講演（9月13日）
- * 西沢准教授、朝日・大学パートナーズシンポジウム「異端が開く未来－大阪近代化の幕開けと福沢論吉－」（大阪 ABC ホール）にパネリストとして参加（9月20日）
- * センター調査員（田口、堀、石井）、SFC 高等部の福沢を扱う総合学習にチューターとして参加（10月23日）
- * 大阪リバーサイドキャンパスでの福沢研究センター講座〈『学問のすすめ』を読む〉にて講義
第1回：米山（11月1日）、第2回：岩谷（11月29日）、
第3回：宮内（12月13日）、第4回：都倉（1月17日）、
第5回：西沢（2月28日）
- * 西沢准教授、三鷹新和塾で講演（11月12日）
- * 西沢准教授、「住友会館」にて島谷ゼミ（37～41年卒）合同懇親会で講演（11月13日）
- * 平野副所長、弁論部の依頼により、展示室にて講演会（11月18日）
- * 岩谷副所長、第47回福沢論吉記念祭全国高等学校弁論大会に審査員として参加（11月20日）
- * 西沢准教授、職員親睦会である水曜懇話会で講演（11月21日）
- * 米山所長、中津市の依頼により、『第28回人権を守る市民の集い』で講演（11月26日）
- * 米山所長、SFC 高等部の依頼により、総合学習の時間のために講演（11月27日）
- * 米山所長、SFC 高等部の学部説明会（12月9日）
- * 有末賢法学部教授（所員）、福沢先生109回忌法要時記念講演会にて講演（2月3日：中津）
- * 米山所長、東京国立博物館にて「同床異夢」と題して講演（2月7日）
- 訃報
- 顧問 桑原三郎名誉教諭ご逝去（1月21日）
- その他
- * スペースシャトルに搭載された「独立自尊」の書が星出飛行士の帰還に伴い返却される（10月14日）
- * 創立150年記念式典への要員を派遣（11月8日）
- * 福沢展会期中に所員、職員、調査員を要員として派遣

スタッフ一覧

所 長 米山 光儀 教職課程センター教授
副 所 長 岩谷 十郎 法学部教授
平野 隆 商学部教授

専任所員 都倉 武之 福沢研究センター専任講師
西沢 直子 福沢研究センター准教授

所 員 池田 幸弘 経済学部教授
(兼運営委員) 岩崎 弘 幼稚舎教諭
梅垣 理郎 総合政策学部教授
小野 修三 商学部教授
小室 正紀 経済学部教授
沢田 達男 理工学部教授
竹内 勤 医学部教授
樽井 正義 文学部教授
林 温 同
山内 慶太 看護医療学部教授
有末 賢 法学部教授
井奥 成彦 文学部教授
牛島 利明 商学部教授
大久保忠宗 普通部教諭
太田 昭子 法学部教授
大塚 彰 志木高等学校教諭
小川原正道 法学部准教授
加藤 三明 幼稚舎長
斎藤 暁子 女子高等学校教諭
末木 孝典 高等学校教諭
藤田 弘夫 文学部教授
Ballhachett, Hellen 経済学部教授
宮内 環 経済学部准教授

顧 問 飯田 鼎 名誉教授
河北 展生 同
小泉 仰 同
坂井 達朗 同
佐志 傳 元高等学校教諭
寺崎 修 名誉教授
中村 勝己 同
西川 俊作 同
松崎 欣一 名誉教諭

客員所員 安西 敏三 甲南大学教授
飯田 泰三 島根県立大学大学院北東アジア研究科長
井田 進也 大妻女子大学教授
區 建英 新潟国際情報大学教授

掛川トミ子 関西大学名誉教授
片岡 豊 白鷗大学教授
我部 政夫 山梨学院大学教授
川崎 勝 南山大学教授
佐藤 正幸 山梨大学教授
白井 堯子 千葉県立衛生短期大学名誉教授
進藤 咲子 東京女子大学名誉教授
曾野 洋 玉川大学准教授
高木 不二 大妻女子大学短期大学部教授
西田 毅 同志社大学名誉教授
浜野 潔 関西大学教授
平石 直昭 東京大学名誉教授
平山 洋 静岡県立大学助教
藤原 亮一 田園調布学園大学教授
堀 幸雄
前坊 洋 東北公益文科大学教授
松沢 弘陽
松田宏一郎 立教大学教授
宮村 治雄 成蹊大学教授
森川 英正
山田 央子 青山学院大学准教授
林 宗元 韓国関東大学校教授
Craig, Albert ハーバード大学名誉教授
Saucier, Marion フランス国立東洋言語文化大学教授
Nguyen thi Hanh Thuc ホーチミン市外国語情報科学大学講師

研究嘱託 遠山 隆淑
田中 康雄
金 眞琬
巫 碧秀
三島 憲之

事 務 局 酒井 明夫 事務長
赤堀美和子 係主任
望月麻実子 嘱 託
松崎 佳美 同
杉原 優 同
手取屋幸代 派遣職員
石井寿美世 非常勤嘱託
坂井 博美 同

他に、『慶應義塾150年史資料集』調査員、
学部生アルバイト、16名
(3月31日現在)

慶應義塾福沢研究センター通信 第10号

Newsletter of
Fukuzawa Memorial Center for
Modern Japanese Studies,
Keio University

発行日 2009年3月31日 (年2回刊)
編 集
発 行 慶應義塾福沢研究センター
〒108-8345 東京都港区三田2-15-45
電 話 03-5427-1603
<http://www.fmc.keio.ac.jp/>
印 刷 (有) 梅沢印刷所